

地域福祉コーディネーターの活動の総括

社会福祉法人高知市社会福祉協議会

報告内容

- 1 地域福祉活動推進計画に関連する取り組みの拡がり
- 2 地域福祉人材の発掘・育成
- 3 集いの場づくり
- 4 話し合いの場づくり
- 5 地域福祉コーディネーターの活動を通して



地域福祉活動推進計画に 関連する取り組みの拡がり



【福祉人材の発掘】

676名 (H30.3現在) ※高知市内のみ
(気くばりさん+福祉委員)

【集いの場づくりの充実】

93ヶ所増加

(地域福祉コーディネーターのかかわり**64**ヶ所)

【ほおっちょけん学習】

18回 **1,097**名 受講
(H27年度~H29年度末)

【話し合いの場づくり】

支え合い会議+住民座談会+支え合いマップづくり

70回開催



具体的な活動へと発展 **7**事例

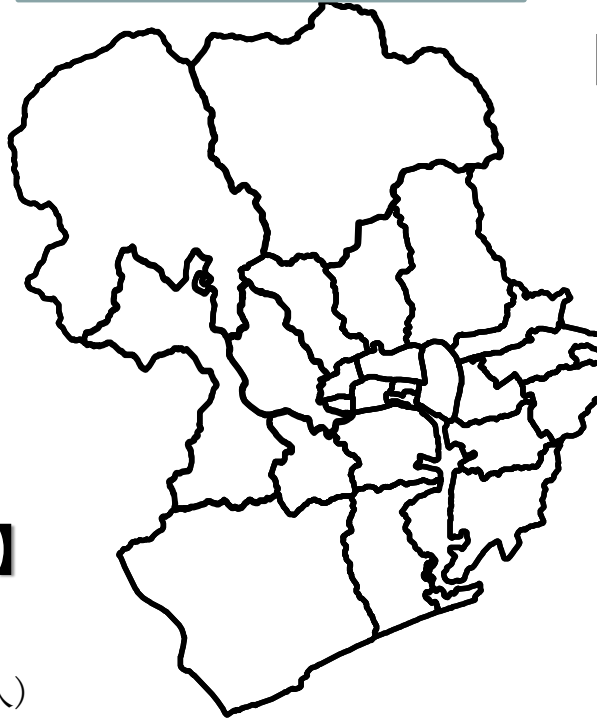
【救急医療情報キットの普及】

14,661本 普及
(参考:高知市独居高齢者数 34,272人)



サロン活動への発展等,見守り体制の構築

高知市 全域図



【ほおっちょけんバッジ】

7,020個 配布
(H30.3現在)

【ストラップ】

13,097個 配布
(H30.3現在)

【ひまわりプロジェクト】

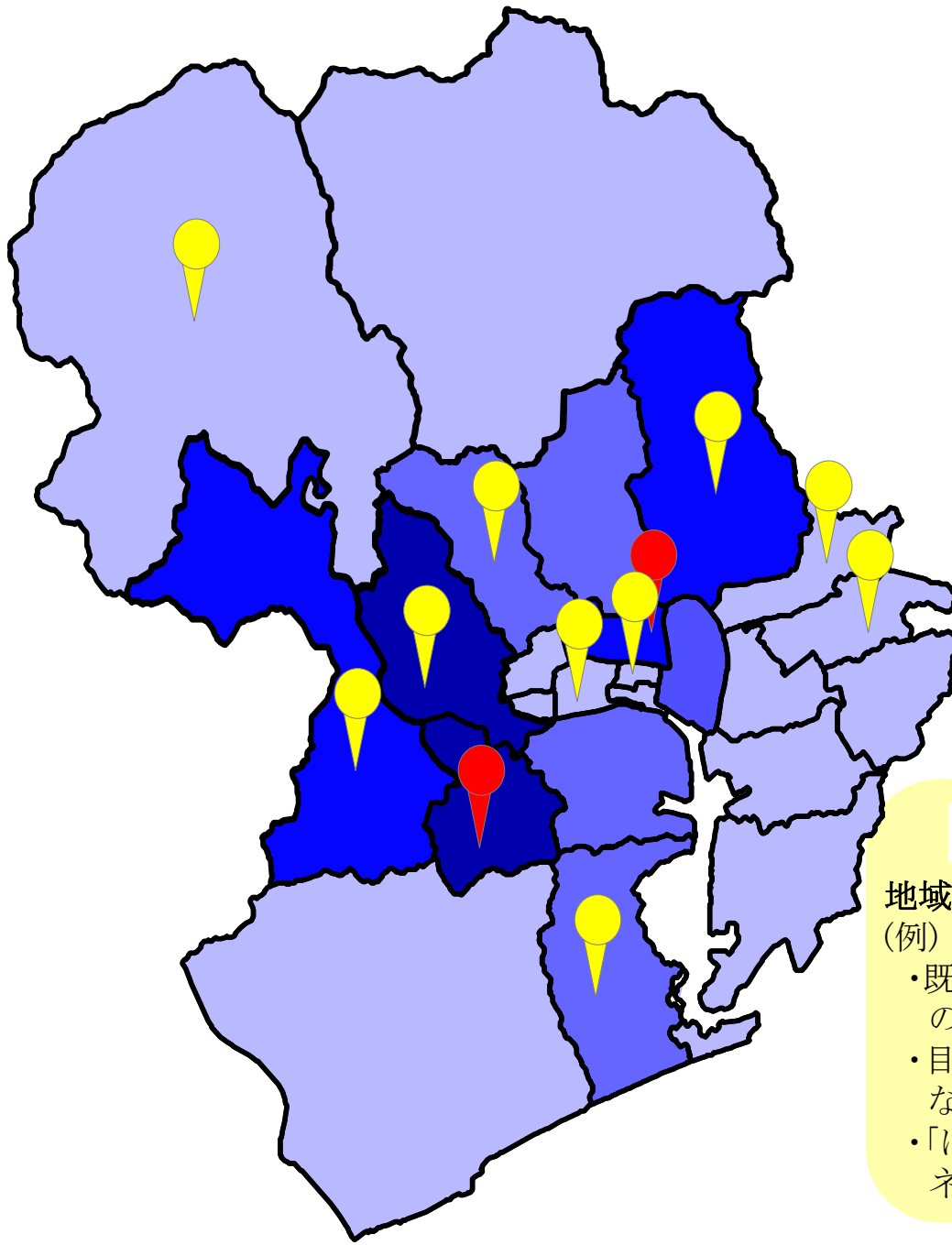
443ヶ所にて取り組みを展開

【地区社会福祉協議会連合会の創設(H26.4設立)】

地域福祉人材の発掘・育成



地域福祉人材の発掘・育成



「気くばりさん」

26地区 520名
(高知市内のみ)

【活動例】

気くばりさん(脳卒中当事者)による百歳体操会場への支援
気くばりさんによる生活支援(ゴミ捨てボランティア)の実施

総数(名)	色
1~20	淡い青
21~40	青
41~60	濃い青
61~80	黒

「福祉委員」

12地区 156名

【活動例】

- ・福祉委員交流会の開催を通じて、サロン活動へ発展した地域もみられている。
- ・民生委員との協働, サロンや百歳体操, 子ども食堂などの様々な地域福祉活動の担い手として活躍している。

総数(名)	色
1~20	黄色
21~40	赤

地域福祉コーディネーターによる支援

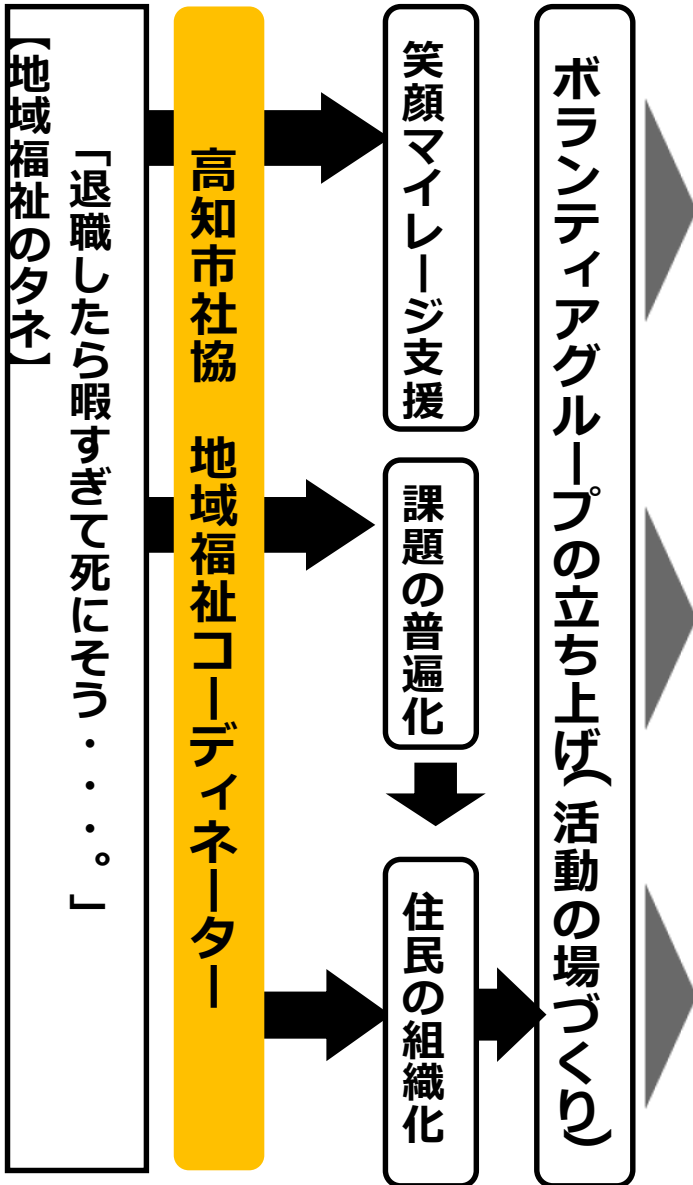
地域福祉活動への参画をコーディネート
(例)

- ・既存の地域福祉活動の継続支援及び地域生活課題への対応等, 課題と福祉人材のマッチングを実施
- ・目的かつ役割がわかりやすいテーマ型活動(子ども食堂など)への参加をコーディネート
- ・「ほおっちょけん学習」のプログラムへの参画をコーディネート



【事例①】 地域福祉人材の発掘・育成

団塊世代の組織化の取り組み



講座の開催



農園プロジェクト



認知症カフェ手伝い



●地域の変化(地域の声)●



いきなり「ボランティア！」と言われても負担感しか感じない。でも、仲間と楽しみながらだったら続けられる。

(団塊世代 男性)



初めのうちは楽しめなかった。でも、他のメンバーとの仲が深まってゆくうちに「あんなことも出来るんじゃないか」と想えるようになった♪

(団塊世代 女性)



自分たちが年老いた時に、ちょっとした困りごとに対応してくれる人たちがいたら心強い。自分たちのできることから始めていきたい。

(団塊世代 女性)



日々の生活の中で自分の役割を見つけられずにいた。他のメンバーと話をすることで自分自身も元気になる。

(80歳代 男性)

生活支援ボランティアとしての活動展開に向けて準備中



集いの場づくり



集いの場づくりの充実

■地域福祉コーディネーターによる支援



●新規立上げ支援(H25～H30)

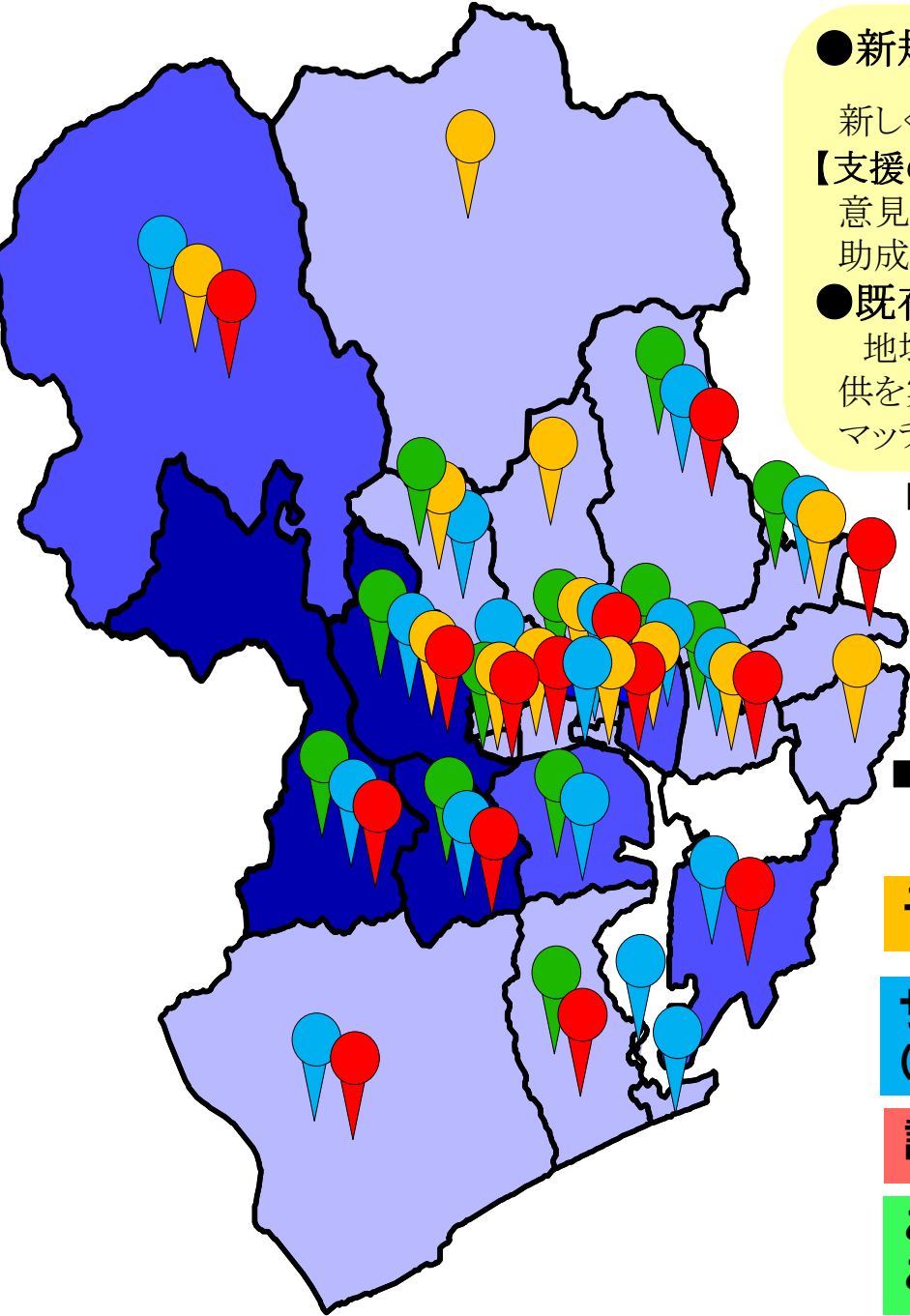
新しく立上げられた **93** か所中 **64** ヶ所にて立上げ支援を実施

【支援の具体例】

意見交換の場づくり(ファシリテート), ボランティアの確保, 助成金の活用支援, 取り組み内容の企画・提案

●既存の場の活用に向けた関係機関との情報共有

地域ケア会議や医療カンファレンス等において地域資源の情報提供を実施。個別支援にあたっている専門職に対して必要に応じたマッチング支援を実施。



■高知市における集いの場の拡がり

集いの場の箇所数(地区別)

箇所数	色
1～5ヶ所	淡紫色
6～10ヶ所	藍色
11-15ヶ所	濃藍色

■高知市における集いの場の拡がり

	【H25年4月】	【H30年3月】
子育てサロン	7地区 7か所	14地区 19か所
サロン (高齢・障がい・全年齢)	14地区 29か所	21地区 63か所
認知症カフェ	未実施	16地区 23か所
こども食堂 こどもの居場所	未実施	11地区 24か所

【事例②】集いの場づくりの充実

子育てサロンの取り組み



子育てサロンの開設



● 地域の変化(地域の声) ●



長年の夢が叶った。これからは子育てママの助けになりたい。
(主任児童委員)



育児を支える拠点として機能していくことが大切。情報の発信だけでなく相談機能を持った場へと発展させたい。
(小児科医師)



親戚が育児ノイローゼで自殺。同じ悩みを抱えるママを救ってあげたい。
(地域住民)

友人・知人の子育て世代に対して精力的に活動をPR。つなぎ役を担っている。

サロン参加者が倍増！
ママがホッとできる居場所になっている

話し合いの場づくり



話し合いの場づくりの充実



地域福祉コーディネーターによる支援

- 話し合いの場づくりに向けた働きかけ
- 話し合いの場づくりの企画(テーマ設定や参加者の構成等),提案,会の運営(ファシリテート)等を支援。
- 意見の集約・整理・住民計画の策定を支援
- 関係機関との連携・協働

高齢者支援センター出張所をはじめ,地域の医療機関及び福祉施設等に対して働きかけ,話し合いの場への参加を要請。地域課題に対して,住民と専門職が共に話し合う場づくりを支援している。

話し合いの場づくり

【ワークショップ】

- 地区社協単位での取り組み実施**
 - ・支え合い会議開催支援(延べ**230**回)
 - ・小高坂地区(延べ開催回数**19**回)
 - ・秦地区(延べ開催回数**2**回)
- 【H25～取り組み開始】

(実践例)

空き家活用サロン, 独居高齢者の見守り, 子ども見守りパトロール

○**小地域(概ね町内会)単位での取り組み実施**

- ・10地区16回【H28～取り組み開始】

(実践例)

見守りの仕組みづくり, 世代間交流イベントの実施
住民の困りごとの把握ができる仕組みづくり

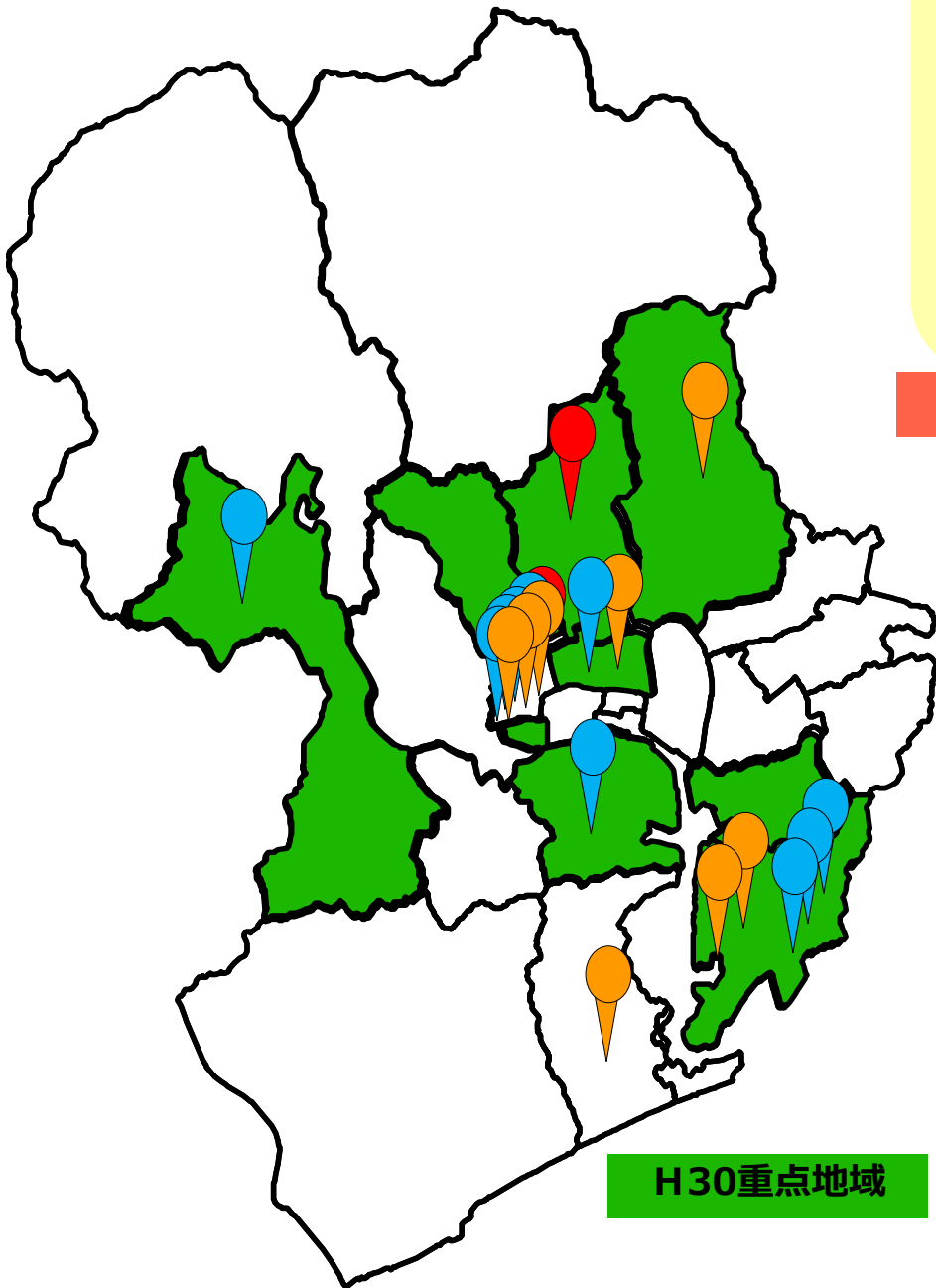
【**支え合いマップづくり**】

小地域における話し合いの場づくりの手法として積極的に活用
実施回数：**33**回【H25～取り組み開始】

(避難行動要支援者対策含)

(実践例)

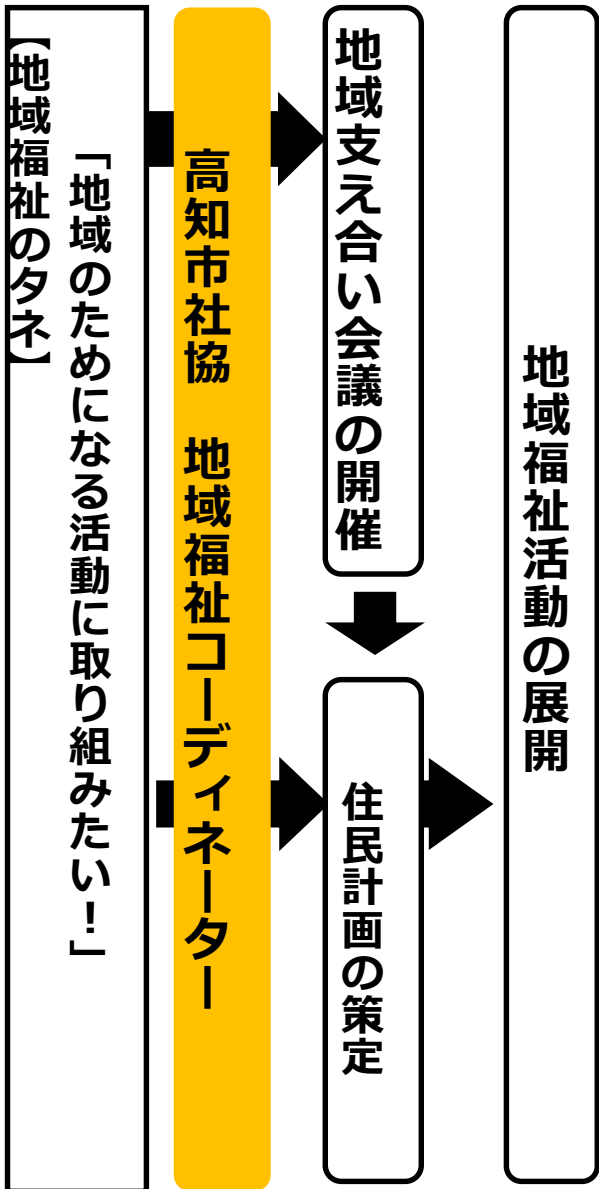
要支援者のサロンへの誘い出し, 交流イベントの実施



H30重点地域

【事例③】 話し合いの場づくり

地域支え合い会議の取り組み



空き家サロン



独居高齢者見守り



子ども見守りパトロール



● 地域の変化(地域の声) ●



支え合い会議に参加したことをキッカケに、地域に対して関心を持つようになった。日々の生活の中でアンテナを立てておくことを意識したい。
(お宮 総代)



大切なのは行政に頼るのではなく、地域全体で支え合っていくこと。地域で話し合いをしながら支え合い活動を進めていきたい。
(地区社協 役員)

町内会毎に話し合いの場づくり



今までは地域とつながる術を知らなかった。仕事の合間には地域の活動に参加していきたい。
(参加者の子育てパパ)



回覧板を活用して、地域の困りごとを集約する仕組みを作ろう！困っている人の手助けが出来ればいいなと思っている。
(参加者の子育てママ)

地域福祉コーディネーター の活動を通して



成 果

○小地域における話し合いの場づくりを通じた支え合いの仕組みづくり

住民が「最もまとまりやすい範囲(H24実施アンケートより)」として考えている小地域(概ね町内会単位)にて支え合いマップづくりや住民座談会を実施することで、より具体的な生活課題への気づきや共有を行うことができるだけでなく、住民自身が他者の悩みや問題等を自分事として捉え、行動につながった萌芽的事例(独居者への訪問・ゴミだし支援・困りごとを回覧板で集約する仕組みづくり)とともに、話し合いを通じて「ちょっとした困りごとの支援を行うための地区限定の助け合いの仕組みづくり」といった新たな社会資源の開発に向けた検討を始めた町内会も出てきている。

また、このような話し合いの場は福祉教育的な機能も有するものであり、課題を抱えながらもSOSを発信できない住民を知り、課題解決に向けた方法を話し合える場としても有効であることが分かった。

さらに、このような話し合いの場づくりにおける「テーマ設定」としては、課題を自分事として捉えやすく住民の課題意識も高い「防災」(平成24年度実施アンケート調査より)を入口とすることで、効果的に支え合い・助け合いの取り組み推進を図ることができた。

○住民の地域活動への参加を促進する「テーマ型活動」と「住民の組織化」

子ども食堂のボランティアに代表されるように、目的や役割が明確であり、なおかつ、「これなら出来る」という「テーマ型の活動」、日々のちょっとした困りごとへの対応等、地域の課題や協力をしてほしい内容を具体的に伝え、働きかけていくことで、効果的な人材育成に繋がっていくことが、いくつかの事例を通して見えてきた。

また、団塊世代の組織化の事例のように「楽しいと思える」といった普遍的なテーマを活動への入口とすることで、これまで地域福祉の分野とはかかわりの無かった住民を巻き込むことも出来ている。

課 題

○住民と専門職のネットワークの構築

個別支援の過程の中で、支援を包括的に提供していくためには、住民の福祉活動との連携が求められるが、現状では地域福祉コーディネーターの持つ情報(既存のインフォーマル資源)の試行的な活用に留まっているのが現状である。

今後の課題として、地域住民と専門職が共に課題を共有し、双方の役割分担を行い、ともに支援していくために、専門職と住民の「出会いの場」において、住民と顔の見える関係性を構築する必要がある。